

15 済生学舎開校前後の川上元治郎の手紙と報告書及び当時使われた教科書

岩崎 一・殿崎正明・唐澤信安

日本医科大学

(一) はじめに

済生学舎は明治九年四月九日の創立である。開校の準備中に創設者長谷川泰が終生、師と仰いでいた順天堂の佐藤尚中が病に倒れたため(明治八年四月十三日大咯血)佐藤の経営していた医学校「済衆舎」の教育面の依頼を受けて明治八年十二月二十七日認可されてはいたが正式の開校に先立って講義が開始されていた。今回は長谷川の元書生であった川上元治郎の回想や書簡をもとに、その黎明期ともいえるべき済生学舎の創立当時の有様を検証するとともに、開校前に使用された「華氏病理摘要」と開校後に出版使用された「内科要略」を紹介する。

(二) 川上元治郎の報告

川上元治郎(東大別科生、日本医事週報主)の回想によれば済生学舎開業願は明治八年十二月二十四日に東京府知事に提出され同年十二月二十七日に直ちに認可されていた。但し年末のため、桜の季節明治九年四月九日を創立日とした。

開校当時既に生徒は二十八、九名おり教師は長谷川舎長と山崎玄脩(げんしゅう)(長谷川の父、宗済の元弟子、明治九年東大医学部第一期生)、丹波敬三(東大薬学科卒)計三名で開校した。然るべき日本語の教科書は少く、全てドイツ語の原書で教授していた。学校で文典や解剖生理の訳読を教えると同時にドイツ語で内科や外科学を教授していたとある。開校時の生徒は学校の他に私塾で変則読みを教わるなどして全くドイツ語の読めない者は殆どいなかったという。元治郎が兄、川上鏗太郎にあてた手紙によれば(明治十三年十二月一日)明治十三年当時三百五十名の生徒が在学している事、長谷川舎長自らも三科目の講義を受け持っている事、毎夕六時に寝て十時に起き、それから徹夜で西欧医書の

訳述に努力している事などを伝えている。

(三) 「華氏病理摘要」と「内科要略」について

「華氏病理摘要」(全五巻)、和書(明治八年十一月刊)は米国ペンシルバニア大学のハルツホルン著「エセンシャル、オブ、メデシン」の「病理篇」の訳述書である。これは開校時既に使われていた教科書であるが同書の一部はそのとき桑田衡平訳「華氏内科摘要」として発行されており好評を博していた。それは「内篇」で長谷川著述書は「外篇」ともいうべき「病理篇」であつて姉妹本ともいうべきものである。但し現在の病理学書とは違って症候学、理学診断法、治療法を含む総合的な内科書である。「内科要略」は長谷川の師、佐藤尚中が生前完訳しえなかつたドイツ人、ニーマイエル、ザイツ共著の「病理各論」を完成させたものであるが、病に倒れた佐藤が病床で訳述した「済衆録」(ニーマイエル原著)が呼吸器、消化器、循環器のみであつたのを師の許可をえて完訳したものである。明治十三年頃には数百名の生徒が在籍しており、いちいちドイツ語の訳書から教えるわけにもいかず、各教師がメ

モランダムを出版するようになった。

長谷川著の「内科要略」は「病理各論」に基づき英米医家の書を参考に翻訳し編集したものである。明治十三年から同十七年にかけて全九巻出版されたが、熱血漢長谷川が生徒教授の備忘録にあてるべく、文字通り寝食を忘れ不眠不休の努力をもつて書きあげた済生学舎の初期の教科書で開校当時使われていた。今回はそのうち明治十三年八月二十五日出版の巻(一)をとりあげたが分類、定義、原因等も現在程明確でなく、急性伝染病と動物毒伝染病に大別され、急性伝染病の中に当時の代表的疾患が十六とりあげられている。また風疹が軽症麻疹にされていたり、脚気が急性伝染病の中で扱われたりしている。

(四) おわりに

今回、長谷川泰の元書生、川上元治郎の書簡及び回想録、更に当時の教科書の一部を紹介し、済生学舎開校時の様子を偲んだ。